

発車ベルが鳴り終わった頃、隣の席はまだ誰もいなかった。

出張帰りの新幹線。平日の夕方という時間帯のせいか、車内はそれほど混んでいない。最後列の窓際に腰を落ち着けて、コンビニで買ったコーヒーのプルタブを引いた。このまま一人で帰れたらいいな、などとぼんやり考えながら、ホームのベンチがゆっくりと遠ざかっていくのを眺めていた。

隣に誰かが来たのは、ドアが閉まる数秒前だった。

(……え)

視線が動いた瞬間、目が合った。三ヶ月ぶりに見る顔が、そこにあった。

恋人の、七翔だった。いや、正しくは、元恋人の、七翔だった。

落ち着いた目元、すっと通った鼻筋。変わっていない。何も変わっていない。ラフなジャケットを羽織って、こちらを見下ろして、静かに微笑んでいた。

(なんで、ここに……)

頭が、うまく回らない。

「零、久しぶり」

何度も聞いたような言い方だった。何事もなかったような。まるで昨日も会っていたみたいに。

「……っ、」

喉が詰まって、声が出なかった。

七翔は返事を待たずに荷物棚にバッグを上げて、隣の席に収まった。

「隣、座るよ」

僕は前を向いたまま、コーヒーを一口飲んだ。気にしないようにすればいい。三ヶ月ぶりに会っただけだ。別れた元カレで、今は他人だ。

(……他人、だから)

わかってる。

なのに、座席の幅がこんなにも狭く感じるのはなんでだろう。肘掛けに腕を置こうとして、七翔の腕がすでにそこにあることに気づいて、そっと引っ込めた。向こうは何も言わない。こちらを見てもいない。ただ静かに座っているだけなのに、その存在が隣にあることだけで、呼吸がうまくできなくなる。

(なにか、別のことをすればいいんだ)

そう思ってスマートフォンを開いてみたけれど、画面の文字が一行も頭に入ってこない。トンネルに差し掛かるたびに、窓ガラスが黒い鏡になって、その端に、七翔の横顔が映り込む。

変わっていない。全部、変わっていない。

(……だめだ。考えたって仕方ない。本でも出そう)

「仕事、遠くまで行ってたの？」

先に声をかけてきたのは、七翔の方だった。何度も聞いた話し方に、思わずそのまま答えてしまう。

「……うん」

「そっか。お疲れさま」

声が柔らかかった。

「七翔は？ 終点まで、乗るの？」

気づいたら、僕の方から聞いていた。

「そうだよ。零は？」

「……僕も、そう……」

「そっか」

それだけだった。でも七翔は少し笑って、また前を向いた。

その後は、短い言葉が時々続いた。会話というよりも、ただそこにいるような時間だった。それなのに不思議と、沈黙が苦しくなかった。

一時間ほど経った頃、僕はトイレに行きたくなった。

「ちょっと、前通るね……」

「どうぞ」

七翔は足を引いて、目を上げた。目が合うと、静かに頷いた。

通路を抜けて、デッキへ向かう。走行音が大きくなる。個室の引き戸を開いて、中へ滑り込んだ。

狭い空間に、轟音が籠もる。ドアを閉めようとした、その瞬間。扉が、外側から押されてきた。

（え、）

七翔が中に入ってきて、ドアが静かに閉まった。続いて施錠の音が、やけにはっきりと耳に落ちた。

「……七翔、」

「狭いね」

悪びれない。謝らない。狭い個室の中で、七翔はこちらを見たまま、静かに立っていた。

「なんで……っ」

「零とゆっくり話したくてさ……♡」

それだけ言って、七翔はゆっくりこちらに近づいてきた。走行音が壁に反響して、外の音を全部消していく。アナウンスも、車内の喧騒も、何も聞こえなくなっていく。

(大声を出せばいい)

わかってる。ここで叫べばいい。

「……で、出てよ」

でも、口から出たのはそれだけだった。声が小さすぎて、自分でも拒絶に聞こえなかった。

「それは嫌」

七翔が静かに言って、僕の頬に手を伸ばしてきた。

(近い……っ)

顎のあたりに指が触れる。払いのけようとして、でも動けなかった。七翔の目が、余裕そうに見えるのに、どこか必死な色をしていた。

そのまま大きな手が、首筋を伝う。

「っ……やめ、て……っ」

「ごめん、少しだけ」

シャツの上から、七翔の手がそっと身体に触れてきた。布越しでも体温がじわりと伝わってくる。逃げようとしても、狭いトイレの中だ。あっという間

に背中が壁に当たる。

「……覚えてる？」

「っ……！？」

静かな声だった。責めていない。ただ、確かめるみたいに言う。

七翔の手が、シャツの上からゆっくりと這い上がってくる。腹、わき腹、胸のあたりへ。布越しなのに、指の動きがはっきりと伝わってくる。形を確かめるみたいに、ゆっくりと。

「身体、覚えてるだろ」

「ん……っ♡」

しばらくそのまま触れていた七翔の指が、今度はシャツの一番下のボタンにかかった。

「ちょ……っ！ なに、して……ッ」